

藤田学園医学会誌に寄せる

藤 田 啓 介

日本の古い医科系大学が刊行してきた研究機関誌（〇〇医学会誌、…Journal of Medical Science など）には、篤学の研究者さえ、ほとんど目もくれないものがある。それらは、数十年間、いくたびか存続の是非を学内外から問われた。そして今や、まったく惰性で細々と続刊を余儀なくされているとしか言いようのないものがある。その骨組みや内容からも、一般科学書ならば続刊の社会的意義はないにひとしい。

それにもかかわらず、わたくしたちの学園においても、藤田学園医学会誌、Bulletin of The Fujita Medical Society の発刊が企画された。当初、私とその動機づけに、いささかならず感したことは、いなみえない事実であった。それは、おごなりに着手できないので、仕事の前で遅延逡巡するいつもの伝であった。しかしその間、他誌の実態を知り変遷を回顧することは、結果的には無駄な紆余曲折ではなく、他山の石となった。

学内機関誌は、大学院のためには教育上、意義のある学術出版活動といえなくもない。しかし他と同工異曲の骨組みと内容であれば、同じ轍をふむ可能性が多分にある。それは一読もされないうまあの「書棚の奥底に重ねて置く積んで置くもの」の一つとなるに違いない。それは単行本ではないゆえに、学園を未来にわたって繋縛して続刊を強いよう。やがて、それらが場をとるようになると無用の長物のそしりを免れざるをえないのは言うまでもない。

それゆえに、学内のリーダーシップのかたがたの大勢が発刊に意志統一されて以来も、わたくしはその決断をいつになく、ためらった。藤田学園医学会誌を永遠の事業として継続発展させる範は、第1巻第1号であるからであった。その骨組みと肉づけの基本方針をきめることが、わたくしに与えられた課題であった。一つでも本物の玉が光る玉石混濁の内容が、各号の最低条件であろう。

そして、学内の研究発表が盛り込まれた初校が目前にある。戸惑うことなく、わたくしは他学の医学会誌への越境をあえておとした発言さえしなければならぬ。それは、そこそこに見られる大同小異の「発刊の辞」の常識の枠とも言える総論からはみ出した各論である。

話をいまから約三十年前、既存の医学会誌へ論文が殺到した時期に遡る。それは昭和28年、医学部、医科大学において、現大学院制度が充足する数年前である。旧制度による学位のかけこみ申請のための投稿が相次いだ当時である。和文・欧文の機関誌の各号は、すべて製本限界に近いくらい分厚い。投稿者の大部分からは、特別掲載料が加算徴収された。それらは年間に発行可能な限りの増刊につく増刊で、図書館事務は門前市をなすありさまであった。言うまでもなく、そのことが、その当時、それらの機関誌に対する学内の一般の評価が、一時的にせよ高かったというのでは決してない。投稿論文のレベルは論外としても、数すら激減する衰退一途の現状は、全国的に、基礎医学を専攻する M.D. が減る一方であったことによるかもしれない。

しかし、学内誌自体がなによりもまず、指摘されねばならぬことは、その編集委員会が弱体であり、有名無実としかいようがなかったことである。わたくしの知る限りでは、欧米の一流学術雑誌に投稿したときに、はね返される、レビューアー、レフェリーによる手きびしいが、納得のゆくコメントはない。冗長な文章や先走りの考按の削除、晦渋な表現の修正もない。綿密なデータの検討などは、日本の大学機関誌には、一切なかったか、ないにひとしかったのではないかと私は思う。

さらに、多くの会誌のほとんどの内容が、初心の研究者による学位論文で占められている。それらは、一般的に見て、比較的水準の低い原著である。しかも著者名の上に、指導教授名が列記されている。編集委員に、初心者に対する妥協や、同僚に対する遠慮、なれあい意識があったのはやむをえない。やがて殺到する投稿論文には、全くといってよほど編集委員による手が入れられなくなった。それらは、いつの間にか、事務局受付から編集委員会を素通りして印刷会社へ直通するようになった。

そのうえ、学内の優れた研究は、学位論文掲載誌という観念の定着した会誌を意識的に避けて、他に発表された。学内研究機関誌は、その名にふさわしく、学内の研究活動を広く反映し、網羅した内容ではなくなったのは当然であった。ともあれ、それらは発刊の時点で、手取り早く他誌を模倣したために、十ば一からげの学内誌になる宿命であった。すぐれた能力をもった編集委員によつ

て正鵠をついたコメントがなされなかったために、内容の低下だけでなく会誌への投稿拒否反応さえも見られた。こうして、既存の大学医学会誌は既成の観念や諦観や慣行の悪循環によって、学内評価の下落に拍車をかけられる始末となった。このような長き前書きは、わたくしの藤田学園医学会誌への、次にのべる、二三の提言——それらは自然科学の文献を何ほどか心得ている人ならば、どれもとりたてて独創性や新鮮味のあるものではないが、日本の大学医学会誌としては、やや異例な内容——とも深くかわりあいがあることである。

第一に、このたび発刊される藤田学園医学会誌は、学位論文としての原著を、原則として掲載しない。それらは同誌臨時増刊号を開放して学位論文集として収録する。優れた内容の原著は、総説として寄稿を委嘱する。とくに学内研究者によるユニークなレターまたは速報、オリジナルな短報に広い窓口をあけて積極的に掲載する。ただし、短報は短報でなければならない。数ページを越えないこと、一行以内で内容の独創性を記入することが原則である。実験方法と評価に耐える結果が明記されたものに限られることは言うまでもない。

研究者には、たまたま机のひき出しの奥底にしまつて、忘れてしまう実験成績が、多かれ少なかれ、あるものである。実験のまとまったつど、速報か短報として、比較的、気軽に発表できる場があれば、そのようなこともなくなろう。また、こうして蓄積されたデータは、整理して学外の分科専門誌の原著として発表することもできよう。さらにまた、それらは、同じようなテーマに関心をいざく学内の研究者による批判や追試や共同研究への呼びかけにもなる。

第二に、わたくしが強く望むことは、学内外の第一級の学者による総説が本学会誌の毎号の冒頭を飾るものとして、掲載されることである。それによって、多彩な医学分野のあれこれにセンセーションをまきおこした研究の新しい動向が紹介されよう。学内機関誌が往々、陥り易い独断と偏狭に学外の冷徹な目が注がれよう。その総説が医学界での最近のトピックスであるなしにかかわらず、ライフ・ワークといわれるに備する学的内容であれば、その掲載は意義がある。強いて極言すれば、このような第一級の学者の総説がえられないときには、たとえ、年間の発行号数を減らしても続刊は待機されるべきであろう。

定期刊行の藤田学園医学会誌は、密室のなかのアカデミシャンによる自己陶醉型の原著掲載誌だけであってはならない。それだけでは、他機関誌へのわたくしの批判や見解からなる発言は撤回されなければならない。むしろ、本誌発刊に対する動機や意義さえも、わたくしは見失うと言っほかない。

第三に会誌に望むことは、CPC の報告を各号に必ず一編は掲載していただきたいことである。本医学会は、教育と診療と研究をこととする学園に所属するのであるから、本学で行なわれた CPC の記録は、とりわけ重要であると、わたくしは、常日頃、考えている。臨床医学者、基礎医学者、学生が多数参加して、多くの臨床記録をもとにして、熱心に討議された内容は、本学の教育と診療のレベルを示す貴重な症例報告であろう。

これらの提言を要約すれば、定期的に刊行される本医学会誌は、原著掲載誌ではなく、1) 学内外の優れた研究の総説、2) 学会員による短報、速報、3) 本学での CPC (適当な原稿があれば、海外研究機関の紹介など) を主な内容とする。

その総説委嘱の決定、投稿論文に対する適正な講評などに編集委員会の柔軟で周到といえるリーダーシップが一貫して堅持されること、Nature、Science、Lancet などを手本にした速報やレターが重点的に積極的に掲載されて、学園内で研究の牽引力や潤滑油になる機関誌でありたい、というのが、わたくしのささやかな希望と期待である。

執筆を依頼された「発刊の辞」を終えるにあたり、全体として編集のありかたにつきる、この内容には、読む人々によっては、いささかクレームがつくとわたくしは思う。しかし、この種の大学医学会誌の「発刊の辞」総論は、他誌のすぐれた記述に繰り返して念を押すまでもないであろう。それを補う弁として、学内誌発刊の学的必然性の有無を問われれば、遺憾ながら、わたくしも、やはり、いとみるのが穏当と思う。本誌の編集委員ならびに読者のかなり多数のかたがたが、かつて一度ならず体験された日本の学会誌の閉鎖的体質や学内独占が続く限り、学内誌発刊は余儀ないことと、わたくしはご理解いただきたいのである。

(藤田学園医学会会長)